

信前信後

大沼法龍

無碍光如来の名号と かの光明智相とは

無明 長夜の闇を破し 衆生の志願をみてたまふ

尽十方無碍光如来の名号は十方世界をし私の無明 長夜の闇をし、往生の志願を満足さして戴き、信仰の儘の生活、生活の儘の信仰、も心も南無阿弥陀仏、を見てよし機を見てよし、死後の往生も有難いが 生きている今、不可説不可思議の功德が身に満ちて感謝の日暮をさせられている事が猶更有難い。

浄土真宗に流れを汲んでいらるる俗よ！ 御聖教の真似ではいけない、読んで合点して有難がつているのは信仰ではない。御聖教の裏に溢れている如来の念力を諦得さして頂かなくては妙味はない。電気が点れば明るくなる、御飯を頂けば御腹はふくるる、飛行機に乗れば目的地に着かれると知って信じても明るくもならねば御腹もふくれぬ、況や目的地には行かない、御聖教は御通りになった信境を書かれたのであって、自分はまだその程度まで進んでいない者が 御言葉の真似をしたつて、指さす指を見ている程度で真如の月を仰いでいるのではない。

歎異鈔の第二節が御説教や法話によく出るが「いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定住家ぞかし」とつたつていているけれども、聖人様は二十ヶ年の修行をやり百夜の祈願をして見て、身動きならぬ業の深さを体験し、聞いたもつたもえ

たも観念の遊戯に過ぎないのだ。

久遠劫からの痺れ切った逆謗の屍は三世の諸仏に捨てられ、今又第十八願からも唯除五逆と捨てられて、出離の縁有ることなしと望みの綱が切れた時の告白であつて、総てがつきて総てが生かされ、計らいつきて見れば、親に計らわれていた事の尊さよ、三千世界の者は皆助かつても私一人は助かる柄ではなかつたと、小我を滅し切った処に宇宙の大我に生かされ、三千世界の者は皆墮ちても私一人を救う本願であつたか、五劫思惟の本願をよくよく案ずれば親鸞一人が為なりけりと飛び上つた境地なのだ。

それを話している人も聞いている人も何の悩みもなく、何の煩悶もなく、何れの行も及び難き身なればとても地獄は一定住家ぞかしたつた、と七百年前の昔話に聞いて成程と思つていただけで、自分は痛くもなければ痒くもないのだから、有難うもなければ嬉しくもないのだ。

語っている人は声や節や抑揚で感動させようとし、聞いている人は其の場の雰囲気に酔い感情で泣いていたのであつて、自分の業に驚き、三定死の立場で泣いているのでないから、聖人様の境地とは雲泥の差が有るのだ。そこへ声を張り上げて「五劫思惟の願をよくよく案ずれば親鸞一人が為なりけり」と流すと、同行は涙を流して私一人の為に御苦勞下さつたのだと感じているが、親鸞一人の為であつて、語っている僧侶の為でもなければ、聞いている同行の為でもないのだ。私の為に聖人様は御苦勞なさつたと思つているが、身替りを頼みましたか、七百年の古の聖人様に現在の人がどうして身替りが頼まれるのです、現在の親子でさえも、の前にいる夫婦でさえも身替りが出来ないのに、況や色もなければ形もない信仰の身替りが出来ると思つているのが大間違いだ。

後生は一人凌ぎと言つていてはありませんか、食物でも親が食べて子供の腹が膨れないのに七百年前の聖人様が私の信仰の代理が出来るものかい。

聖人様は自分の通られた境地を教えられて、一切の道俗よ、この境地まで進めば広い天地が有るぞと、入信の道程を三願転入と教えられたので、方便を通らずに真実に開入する筈がないのだ。手前の川を渡らずに向うの川を渡ろうとしているから、木馬に乗って動いてはいるが進まないのと同じだ。とも綱を解かずにはいるから船は動いていても前進しないのだ。自分の機を抜きにして死後を夢見ているから生活の上に信仰が生きて来ないのだ。第十八願の真似をしていて十八願の身に成る事を忘れてるのだ。素直な風をし、無我の真似をして有難がつてはいるけれども実機は知らぬ顔をしているのだ。

御和讃に

不如実修行といへること

鸞師釈してのたまはく

一者信心あつからず

若存若亡するゆへに

二者信心一ならず

決定なきゆへなれば

三者信心相続せず

余念間故とのべたまふ

三信展転相成す

行者ところをとどむべし

信心あつからざるゆへに

決定の信なかりけり

決定の信なきゆへに

念相続せざるなり

念相続せざるゆへ

決定の信をえざるなり

決定の信をえざるゆへ

信心不淳とのべたまふ

如実修行相應は

信心ひとつにさだめたり

道俗よ、始めから第十八願に入っているように思つて自惚れてはいないか。

言葉だけ他力の真似をしたって信楽開発しなければ皆自力の機執は去っていないのだ。自力を運びながら自力と知らず、疑うておりながら疑いとも知らず、素直な真似して死後を眺めておれば他力のように心得ている為に、何の心配もなく、何の危ぶみもなく宿善が厚い様に自惚れているが、それは疑いが晴れたのではなくて、疑いまでよう進まなくて信前の入口のいるのだから、これを不如実修行と言われたのだ。

その証拠には、

一者信心あつからず 若存若亡するゆえに、

あつからずでくれないのだから薄いのだ、薄いから浅いのだ、浅いのは合点しているだけであつて、他力不思議の深心までには程遠いのだ。

久遠劫から流転を続け、三世の諸仏が呆れて逃げた無明業障の恐ろしい実機の病が照らし出されていなのだから厚くないのだ。それだから法を見れば往生は一定の思いにし、機を見れば往生は不定の思いにするな信仰で、出来て見たり、崩れて見たり、確かな様にもあり堕ちそうにもあるから 若存若亡と言うのだ。この機に用事はない、見抜かれている事を慶べ、この機は千年経つても晴れないのだと教えているが、晴れた事の無い人が教えるから晴れられないと言っているのだ。晴らす力が光明無量に有る事を知らないのだ。晴れて満足が出来ていなければ、十八願でも何でもない。第二十願の桁にいるのだ。だから決定心、金剛心までよう進み切らないのだ。

それで

二者信心一ならず 決定なきゆえなれば

と仰つてあるのだ。 仏心と凡心とが一つに成っていないから今助かっている平生業成の切れ味が判らないのだ。判らないからこの者をお助けくと、この者とお助けとがれて淋しい、淋しいから一体の真似をしている。合体で合わして見るけれ

ども木に竹を継いだようで調子が悪いのだ、何時おけかと念を押して見ると死んだらおけと逃げるのだ。徹底した信仰ならこの者をお助けなんて言わないのだ。助かった嬉しさよ、私を離れて弥陀がない、弥陀を離れて私がない、身も心も南無阿弥陀仏と満足が出来ているのだ。満足が無いのだから

三者信心相續せず 余念間故とのべたまふ

で、お説教を聞いている時は助かったような感情で喜んでいますが、家に帰って来ると動かぬ実機が見えて来て、こんな心が出るようではと二の脚を踏んでいるから相續した喜びが出ないのだ。

三信展転相成す 行者心をとどむべし

この三心は互いに關聯しているのだから、一つが徹底していなければ三つ共に零だ、一つが徹底すれば皆生かされているのだ。行者心をとどむべしで 信前信後の水際を心を鎮めて大切に聞きなさいよ。念仏に向いていけば皆他力廻向の第十八願と思つたら大間違いだ。合点している信仰だから信心が淳くないのだ。淳くないから決定心まで進み切らないのだ。決定心がなから念相續をしないのだ。念相續をしないから決定の信を得ないのだ。決定の信を得ないから信心が不淳なのだ。自力や疑心の根が切れていないのだ。根が切れていないから大満足出来ないのだ。

如実修行相応は 信心ひとつにさだめたり

御親の仰せが届いて、墮ちて満足、がって不思議と開發し任せ切ったのは信心一つで決まるのだ。の信か不如実の信か、如実の開か不如実の開かで決まるのだ。の機を抜きにして有難い法を眺めているのは算用合うて足らずだ。

一切の道俗よ二 一々誓願為衆生故、令諸衆生功德成就、十劫已来大音宣布して下さつてあると云う法の御手元は耳に聒胝が出来る程聞かしてあるのだから、今少し機受の信相をはつきり教えたらどうだろう。他力廻向ぞくと空手形ばかり並べているのでは生きた信仰に成らないぞ。

お前の為の御馳走だ、お前の為のお膳だと言われた時、満腹の者は何時迄も待っていていられようが、空腹で泣いている者が、何時食べさせて下さるのです、死んだら食べさせてやる、それで満足出来るか。

自分の罪業深重にも驚かず、自分が逆謗の屍で有る事も知らず、歌うてうてがっついていれば他力のように思い、理屈が判れば自分は宿善が厚いからと自惚れている者は死んだらおけて安心も出来ようが、法の鏡に照らし出された逆謗の劣機が三定死の境地に立たされてる時、此の苦惱が何時助かるのだと泣いて求めた時、死んだらお助けで満足が出来るものかい。

今の苦惱を今晴らして下さってこそ平生業成ではないか。今の劣機を今生かして下さってこそ現生不退ではないか。今の自業苦を今遁れさして下さってこそ抜苦与楽ではないか。今の猛火を今清涼風に変えて下さってこそ転悪成善ではないか。今の動かぬ闡提の機を今動かして下さってこそ不思議の仏智ではないか。今の黒雲を今消除して下さってこそ心命終ではないか。

法龍の久遠劫来の罪業の結晶はこの一刹那に納まり、尽未来際に流転を続ける踏み出しはこの一念にあるのだ。肉体の命終などは問題ではないのだ。

地獄一定が極楽一定に生かされた此の一刹那こそ、流転の絆は截ち切られ、十方法界の功德を全領して、私の行く処は皆お浄土なのだ、それでこそ現当二世の幸福と言えるのだ。

一切の道俗よ、往生浄土の名に執われて心眼を開く事を忘れてはならないぞ。